

【企画書】**『とらいふあーむ』の実現に向けて****運営企画推進室
(社会福祉法人とらいふ とらいふ武蔵野)****【要旨】**

特別養護老人ホームとらいふ武蔵野は、Covid-19 のパンデミック以前は、市内に7つある特養の中でも群を抜いて面会者の多い施設であった。多いときは月間の面会回数が900回を超え¹⁾、毎日のように来所する家族も多くいた。そのような中、この未曾有のコロナ禍によって、感染防止のため面会制限を長期に敢行し、入居者と家族の関係が分断されてしまった。また、法人理念²⁾にも謳われているが、私たちとらいふ武蔵野は、「地域との関わり」を重視しており、社会福祉法人として、関前・西久保の両地区を筆頭とした市内の地域組織との関係を深めていきたいが、これも同じくコロナ禍によって、その接点の維持が非常に困難となっている現状がある。これらの諸問題に対して、「園芸療法」を援用した住民参加型の福祉コミュニティの構築及び醸成を活性化させる装置(とらいふあーむ)を創造する。これを自発的かつ長期的に住民主体によって活性化させることによって、ソーシャル・キャピタル³⁾(以下 SC と呼ぶ)の向上を図り、法人が福祉都市武蔵野市における地域包括ケアシステム構築のための本来的な役割を担い、公益に資することを目標とする。

1. はじめに

とらいふ武蔵野の南側に位置する、保育所とデイサービスの中間のエリアを「バリアフリーガーデン化」し、これを『とらいふあーむ』と呼称する(図-1)。土壌部分が地上から約 80cm にある構造のプランター『ベジトラグ』⁴⁾を採用し、それらをエリア内に並列配置することによって、利用者が立ったままでも、車椅子に座った状態でも、腕を伸ばせば土に触れることができる環境を創出する。ベジトラグの採用により、足腰が不自由で

あっても楽な姿勢で作業をすることができる。



図-1 バックヤードの現状と企画イメージ図の比較

本活動においては以下のような効果を期待することができる。

1.1 レクリエーションとして

車椅子に座ったままでもプランターの下に足が入るので、身体が土に近くなり、耕す・植え付け・収穫などの作業を簡単に行うことができる。コロナ禍で社会活動が激減してしまっている施設利用者とその家族に対して、低コスト・低リスクにて非日常を提供する。

1.2 園芸療法として

植物を育てることで「気持ちが良い」と感じる人は多く、五感で自然を感じると癒しの効果が得られるというデータがある⁵⁾。土に触れ、植物の成長に心を動かすことで、ストレスから解放され心身がリラックスし、また、植物のにおい(香り)で嗅覚が刺激されることにより、脳が活性化され、身体や心が健康な状態へと導かれる。昨今その効果が注目される「農福連携」⁶⁾を、研究者との協働により実現する。

1.3 介護職員の離職対策として

職員と利用者及びその家族とのコミュニケーション機会が増加することによって、職員の利用者に対する自我関与とケアの質の向上を促進する。また、他業種との職業満足度の差別化によって、介護職員に対する施設への帰属意識の醸成と、それによる離職抑制にも寄与する。

1.4 地域貢献活動として

保育所とデイサービスの間位置するスペースを有効活用し、利用者と多世代にわたる地域住民との交流の機会を創出する。暮らしの保健室の6つの機能(相談窓口、学びの場、安心な居場所、交流の場、連携の場、育成の場)を持つカフェテリアを併設することにより、利用者の社会性の再獲得による QOL 向上、多世代地域住民への ACP 促進、家族介護支援、介護人材(財)育成と事業所間連携の強化等の効果を期待する。

1.5 「とらいふマルシェ」の開催

園芸活動の延長として、とらいふ武蔵野駐車場において収穫物の販売、地域店舗による出店販売、近隣住民や施設職員によるフリーマーケットなどを行う日曜朝市「とらいふマルシェ(仮称)」を開催する。そのことにより、地域から遮断されがちな特養を住民に開かれた場所、市内におけるランドマークとして位置付ける。

1.6 介護福祉業界全体の社会的地位向上のために

ホームページやブログで上記 1.1 から 1.5 までの情報を公開し、内外に対して SDGs 事業(収益事業)の推進と ESG 投資家への宣伝活動を行う。営利事業による収支は全て公開することとし、獲得した収益は次世代への教育資金(奨学金/とらいふ基金)として留保、活用する。孫・ひ孫の世代まで末長く続く互助ベースの地域福祉モデル(『いのちの SDGs』⁹⁾)を展開する。

2. ニーズの把握

当施設の利用者の中には、コロナ禍で家族・地域との交流が長期間絶たれたことにより、認知機能の低下のみならず自尊心の低下や生きる意欲の喪失といった多大な影響を受けているケースが多く見受けられる。そのような利用者に対して、園芸療法を提案したところ「子供が小さい時に家庭菜園を楽しんでいた」「枝豆を育ててビールと一緒に楽しみたい」などという返答を得ている。また、来所する家族に園芸活動の是非に関する意見を聞いたところ待望論が圧倒的に多く、昨年末に当施設で実施された東京都福祉サービス第三者評価¹⁰⁾においても、「直接的な接触が謝絶・制限されているなかで、少しでも刺激のある生活をしてもらいたい」や「行事や交流会を定期的で開催してほしい」といった意見が多数寄せられている。特養部門の管理職・専門職へのヒアリングにおいては、「ぜひ推進してほしい」と賛成意見が多く上がっている¹¹⁾。一般職員からも「レクリエーションをしたいが、何をしたいかわからない」「気軽に散歩に行ける場所が欲しい」といった意見が上がっている¹²⁾。これらの理由から、利用者、家族、

職員からのニーズは高いと言える。

一方、先述の第三者評価内の職員調査では、「法人の社会的責任を理解している」「経営層にリーダーシップを感じる」といった項目において、管理職も一般職員も「そう思わない」「わからない」という回答が8割を占めた(図-2)。福祉事業従事者としての規範・倫理を伴った健全な施設風土を醸成、維持するとともに、法人としての運営上のコンプライアンスを遵守していくためにも、本企画は重要なプロジェクトとして位置付けられる。

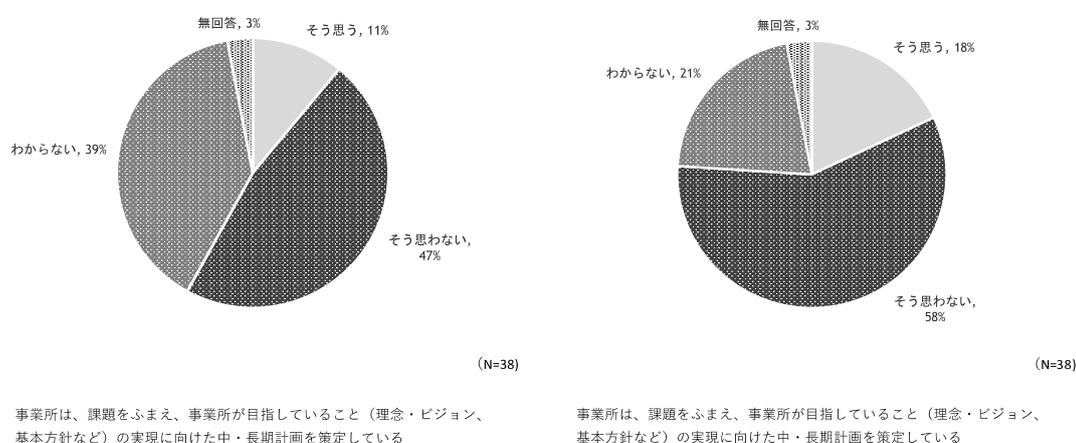


図-2 令和3年度 東京都福祉サービス第三者評価 分析結果報告書
職員自己評価 設問別集計より抜粋 (p.52-59)

また、SC の向上を目標とする理由は、個人レベルでは(1)信頼や規範などの認知的な価値、(2)ボランティアネットワークの構築である。ボランティア活動に参加している行動者が多い地域ほど、失業率・犯罪発生率は低く、出生率は高くなるというデータがあり(内閣府, 2003)、コミュニティレベルでは、後述する湯浅助教の教示を受けながら、客観的な統計を用いたインデックスを作成し、個々人に直接質問した結果を集計して指数を作成する。企画実施過程でその効果を測定しながら、帰納的なデータを抽出することができれば、それを市内の他事業所で応用することを検討する。

3. 理念

本企画の基本理念は、法人理念「人の幸せ」「地域の幸せ」「福祉文化の創造」を採用する。計画の相関性は(図-3)及び(図-4)の通りである。

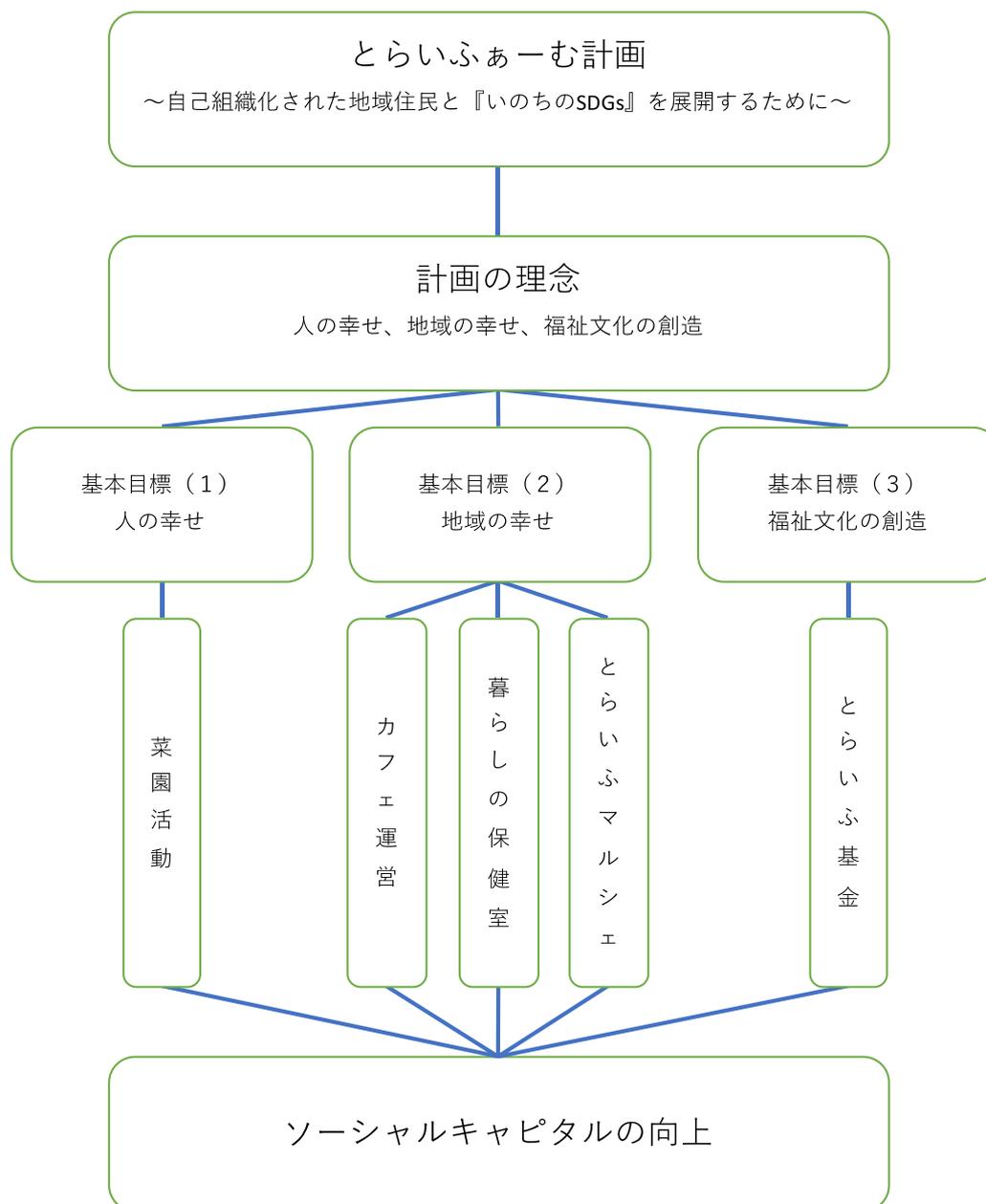
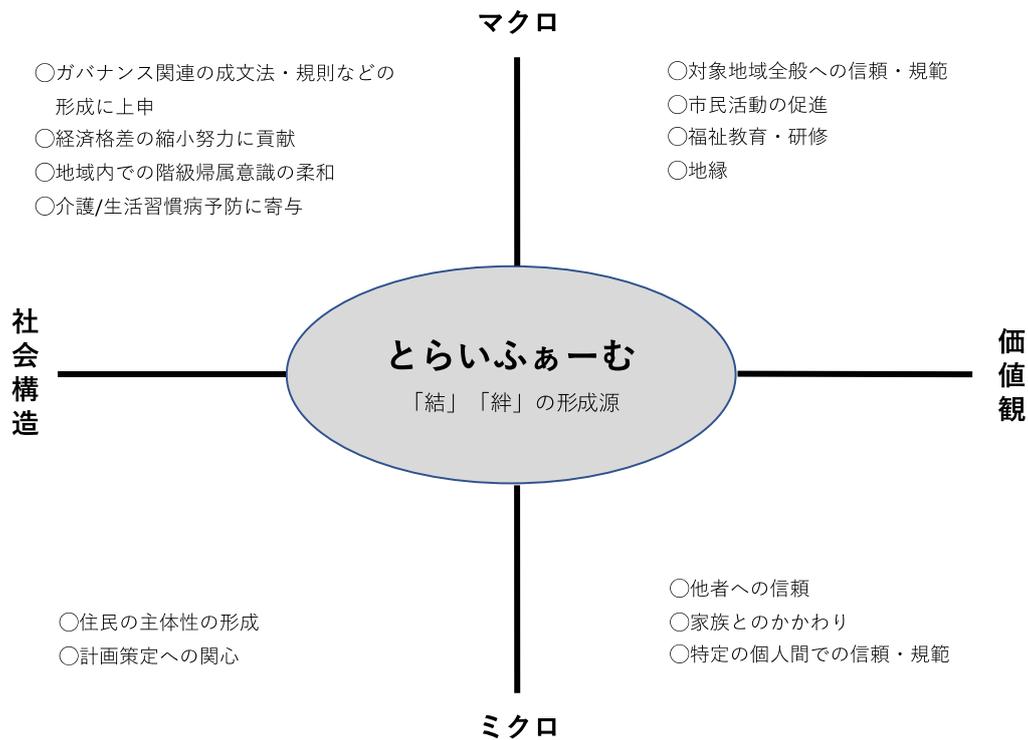


図-3 とらいふあーむ計画 相関図



【本体の装置的役割】

地域レベルにおいて互酬性の規範を醸成するクラブ財としての機能を、コミュニティに開かれた老人ホームという立場から展開することによって、『健康日本21（第2次）』と『武蔵野市第5期地域福祉計画』に寄与することができる

図-4 とらいふあーむの概念整理

4. 実施主体と役割

本企画の実施を担う主体は、開始から当面は運営企画推進室とするが、1年以内に地域住民への段階的移行を開始し、3年以内に住民自体の主体形成を目標とする。その意義は、企画の公共性と民主性の担保のための住民参画の必要からである。当施設の該当福祉区域¹³⁾のなかで、計画策定の段階から有志の住民¹⁴⁾を対象としてワーキングや座談会を開催する。計画の実効性を得るために様々な住民の参画を目指すことにより、地域資源や住民ニーズに基づいたプログラムを展開する。同時に、多様な視点の導入による企画自体の合理性の向上を推進する。

5. ワーキンググループ

本企画は準備構想段階から既にワーキングチームを結成しており、各々の立場から共生社会づくりに向けた包括的支援¹⁵⁾の取り組みとなるような参画をしていくことでコンセンサスを得ている。

5.1 クリーンむさしのを推進する会

ぐっどういる境南¹⁶⁾で展開しているいきいきサロン¹⁷⁾の取り組み(Gs ガーデン)において、当法人との協働は既に5年に及び、相互の信頼関係は構築できている。また、同会には武蔵野クリーンセンターの屋上菜園や市内での生ごみ堆肥化運動など、多岐にわたる実績があり、会長・志賀氏からも、本企画においては主に「人的資源の提供」と「食品残渣の堆肥化」の面での協力の申し出を受けている。

5.2 千葉大学大学院 湯浅かさね氏 研究室

当月初旬の会合で、湯浅助教より企画の段階からの主体的な参加の意思を確認している。その方法に関しては、「身近な屋外空間を緑化することの価値性の検証」や「他施設との利用者層や空間構成の比較」等が上がったが、氏本人からは、具体的な指示やアドバイスといった形での介入による「研究のデータを得るための企画参加」よりもむしろ、実施における様々な試行錯誤の過程を測定していきたいという意向を受けている。

5.3 とらいふ武蔵野 顧問 笹井肇氏

令和4年度第4回会議の場で、武蔵野市の前副市長であり、長年に渡り社会福祉のプロフェッショナルとして地域を活性させてきた当法人顧問の多大な経験と知見を、本企画においては「プロモーション部長」というかたちで参画することによって、理念の具体化と地域貢献活動に寄与したいという意志を確認した。

6. 実施時期

令和4年6月1日から令和7年5月31日までを第一期とする。

令和9年5月31日を以って第一次を終了とする。

7. 実現目標値

評価・進行管理の体制に関しては、参加型評価を主体としながら、方法は客観的指

標に基づく質的統計値を抽出する(図-5)。その時期設定においては、実施のステージごとの評価が望ましく、準備構想段階での施設職員及び関係者各位へのヒアリングを第一回とする。また、第一期の中盤にあたる令和5年12月に実施過程評価を、第一期終了時に事後状態評価を実施することとする。湯浅助教の助力を得ながら、企画の実施結果を示す計量可能な値(人数、時間、意識調査結果等)を設定し、その有効性を、総合的・体系的に評価し、その改善を通じて社会システムの中に位置づけることを目標とする。

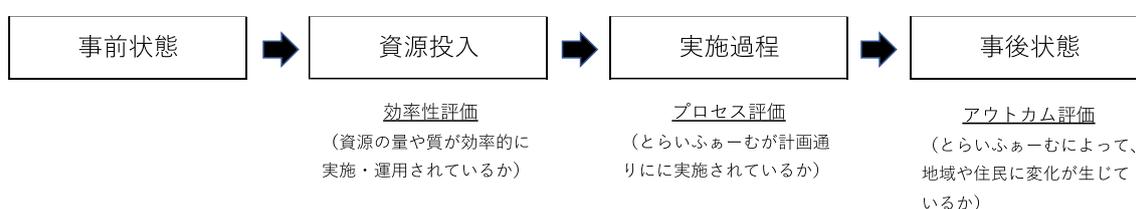


図-5 評価と進行管理

8. まとめ

地域福祉計画の一翼を担うことを目的とする本企画は、地域住民の主体性を基本理念としながら、公民協働で推進していくべきである。住民たちが、権利と義務を持って活動する主体としての市民性を醸成するためには、「地元貢献したい」と思う、住民自身の当事者意識や自負心を持つことが必要となる。武蔵野市は、施策方針でこれを後押しすることができる。具体的には、市や地域社協が住民参加型のイベントを計画し、ワーキングチームを発足し、計画策定の段階から住民の参画を促進し、当事者たちに自我関与を深めてもらうことであるが、『とらいふあーむ』はそのランドマーク的立場をとることによって、ファシリティとしての機能を最大化させ、住民同士による互酬性の関係を促進し、地域包括ケアシステムを活性させることができる。同時に、住民たちが、「自分達には何ができるか」「自分達は何をしなければならないのか」「どのくらいまですることができるのか」などを、住民自身の学びの場とする契機とすることによって、シビックプライドが醸成され、コミュニティが「自己組織化」していき、地域の福祉が推進されていく。社会福祉法人とらいふは、この『とらいふあーむ』という活動を展開することによって、これらを具体化させ、武蔵野市並びに地域住民に貢献することを責務とする。

【補注】

- 1) 大脇施設長にソースの確認を。
- 2) 「人の幸せ」「地域の幸せ」「地域の幸せ」
- 3) 人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴。物的資本（Physical Capital）や人的資本（Human Capital）などと並ぶ新しい概念。（米国の政治学者、ロバート・パットナムの定義）
- 4) イギリス発祥のレイズドベッドプランターの商品名。レイズドベッドは「高さのある花壇」のことを指すが、ベジトラグはそれに更に高さを出してプランタータイプにしたもの。
- 5) 杉原 式穂・小林 昭裕(2002). 高齢者施設における長期的園芸療法活動の効果 J. of Environ. Sci. Lab., Senshu Univ., 9, 187-198
- 6) 障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組をいう（農林水産省）。本企画ではこの概念を援用し、高齢者の生きがいづくりの場を生み出すだけでなく、業界全体の慢性的な介護職の担い手不足において、新たな働き手の確保につながる可能性も探求する。
- 7) 「誰でも予約なしに無料で、健康や介護や暮らしの中でのさまざまな困りごとの相談ができる、敷居の低い居心地の良い雰囲気、看護師はじめ医療の専門家がワンストップの相談窓口であり、地域のサロンによくつろぐことができ、体操やヨガで体を動かしたり、ランチ会やミニレクチャやアクティビティもある」場。訪問看護師の秋山正子氏が「気軽に訪問看護や在宅ケアに出会える仕組みを」と願い、英国のマギーズセンターを参考に、2011年に高齢化の進む大規模団地の一画で開設したのが始まり。
- 8) とらいふ武蔵野内、一階正面玄関横の「地域交流スペース・雅」を使用する。
- 9) 本企画から派生した新事業において計上される収益は公表するものとし、それを地域の子どものための教育事業等へ「とらいふ基金」として留保・投資する。助成を得た子どもたちは『社会貢献』という形で、さまざまな形で個々のエネルギーを地域に還元する。次世代への福祉教育としてのシビックプライドの醸成が『いのちのSDGs』というアップサイクルを循環させる。
- 10) 令和3年12月23日実施 東京都福祉サービス第三者評価 利用者調査・職員自己評価 分析結果報告書 ⑤利用者調査 自由記述(家族)より抜粋(p.42-46)。
- 11) 令和4年5月13日開催の全体会議において、ユニットリーダー、機能訓練指導員、看護師等から「やって当然」「無い方が違和感がある」といった声が多数上がった。
- 12) 令和3年10～12月までの期間に実施された運営企画推進室による「意見交換面談」の統計による。
- 13) 地域包括ケアシステムにおける「中学校区」に該当する、施設を中心におおむね30分以内に必要なサービスが提供される日常生活圏域をターゲットゾーンとして設定する。本企画においては、市内関前・西久保地区をさす。
- 14) クリーンむさしのを推進する会・西久保地区代表の久木野氏は「西久保一丁目 緑を守るまちづくり協議会」と「ひだまり」(老人会)の代表も兼務されており、既に本企画への賛同と協力の意思を確認している。
- 15) 改正社会福祉法第106条の3における包括的な支援体制整備に関する事項の計画化。具体的には①住民の参加、交流、研修等の地域福祉推進のための環境整備(地域交流の「場」の運営)、②養介護者への相談支

援を一体的かつ計画的に行う体制整備(暮らしの保健室の常設)を目標とする。

- 16) 当法人が運営する別事業所。一般型通所・認知症対応型のデイサービスセンター。
- 17) 地域住民団体やNPO法人、民間事業者等が概ね65歳以上の高齢者を対象に、5名以上、週1回以上集まる場で介護予防、認知症予防のプログラムを含む活動(2時間程度)に対し、市がその団体等へ補助・支援を行うことで、高齢者の社会的孤立感の解消、心身の健康維持、要介護状態の予防、住み慣れた地域での在宅生活の継続支援を図ることを目的とする事業。

(修正履歴)

- 6月 3日: 笹井顧問の参画について(7ページ)、未定→プロモーション部長に修正、加筆。
- 6月 7日: クリーンむさしのを推進する会と当法人との協働期間について(ページ)、〇〇年→5年に修正。
- 6月15日: 湯浅助教の参画について(7ページ)、[・・・]企画参加]を目的”とするのではなく”→”よりもむしろ”に修正。